

鷗外博士の追憶

内田魯庵

青空文庫

若い蘇峰^{そほう}の『国民之友』が思想壇の檯舞台^{ひのきぶたい}として今の『中央公論』や『改造』よりも重視された頃、春秋二李の特別附録は當時の大家の顔見世^{かおみせ}狂言として盛んに評判されたものだ。その第一回は美妙の裸蝴蝶で大分前受けがしたが、第二回の『於母影』^{おもかげ}は珠玉を満盛した和歌漢詩新体韻文の聚宝盆^{しゅうほうぼん}で、口先きの変わった、丁度果実^{くだもの}の盛籠^{もりかご}を見るような色彩美と清新味で人気を沸騰^{なだ}させた。S・S・Sとは如何^{いか}なる人だろう、と、未知の署名者の謎^{なぞ}がいよいよ読者の好奇心を惹起^{じやつき}した。暫らくしてS・S・Sというは一人の名でなくて、赤門の若い才人の盟社たる新声社の羅馬字綴^{つづ}りの冠字で、軍医森林太郎^{もりりんたろう}が頭目であると知られた。

鷗外^{おうがい}は早熟であつた。当時の文壇の唯一舞台であつた『読売

新聞』の投書欄に「蛙の説」というを寄稿したのはマダ東校（今の医科大学）に入学したばかりであつた。当時の大学は草創時代で、今の中学卒業程度のものを収容した。殊^{こと}に鷗外は早熟で、年齢を早めて入学したからマダ全くの少年だつた。が、少年の筆らしくない該博の識見に驚嘆した読売の編輯^{へんしゅう}局は必ずや世に聞ゆる知名の学者の覆面か、あるいは隠れたる篤学であろうと想像し、敬意を表しかたがた今後の寄書をも仰ぐべく特に社員を鷗外の仮寓^{かぐう}に伺候せしめた。ところが社員は恐る恐る刺^しを通じて早速部屋に通され、肅々如^{うやう}として恭^{くちひげ}やしく控えてると、やがてチョコチョコと現われたは少くも口髯^{くちひげ}ぐらい生^はやしてる相当年配の紳

士と思いの外なる極めて無邪氣な紅顔こうがんの美少年で、「私が森です」と挨拶あいさつされた時は読売記者は呆氣あつけに取られて、暫らくは開いた口が塞ふさがらなかつたという逸事がある。（この咄は桜木町時代に鷗外自身の口から直接に聴いたのである。）

鷗外は幼時神童といわれたそうだ。虚実は知らぬが、「十ウで神童、ハタチで才子、二十以上はタダの人というお約束通り、森の子も行末はタダの人サ、」と郷人の蔭口かげぐちするのを洩もれ聞いて発憤して益々ますます力学したという説がある。左とに右かく天うまれつき稟の才能に加えて力学衆に超えこ、早くから頭角を出した。万延元年の生れというは大学に入る時の年齢が足りないために戸籍を作り更かえたので実は文久二年であるそうだ。「蛙の説」を『読売』へ寄書

したのは大学在学時代で、それから以来も折々新聞に投書したというから、一部には既に名を認められていたろうが、あまね 洽く世間に知られたのは『国民之友』の S・S・S からである。

S・S・S の名が世間を騒あがした翌年、タシカ明治二十三年の桜の花の散った頃だった。谷中やなかから上野を抜けて東照宮の下へ差掛さしかつた夕暮、偶ふつと森林太郎という人の家はこの辺だナと思つて、何心なにごころとなく花園町はなぞのちようを軒別門札けんべつもんざつを見て歩くと忽ち見附けた。出来心で名刺を通じて案内を請うと、暫らくして夫人らしい方が出て来られて、「ドウいう御用ですか？」

何しろ社交上の礼儀も何も弁わえない駈出かけだしの書生ツぽで、ドンナ名士でも突然訪問して面会出来るものと思ひ、また訪問者には

面会するのが当然で、謝絶するナゾとは以ての外の無礼と考えていたから、何の用かと訊^きかれてムツとした。

「何の用事ありませんが、そんなら立派な人の紹介状でも貰^{もら}つて上りましょう、」とブツキラ棒に答えてツウと歸つた。

その頃私は神田^{かんだ}小川町に下宿していた。忌^{いまいま}々しくてならない

ので、歸ると直ぐ「鷗外を訪うて会わず」という短文を書いて、

その頃在籍していた国民新聞社へ宛^あててポストへ入れに運動かた

がた自分で持つて出掛けた。で、直ぐ近所のポストへ投^{ほう}り込んで

からソコラを散歩してかれこれ三十分ばかりして歸ると、机の上

に「森林太郎」という名刺があつた。ハツと思つて女中を呼んで

聞くと、ツイたつた今おいでになつて、先刻は失礼した、宜^{よろ}しく

いつてくれというお言い置きで御座いますといった。

考えるとコツチはマダ無名の青年で、突然紹介状もなしに訪問したのだから一応用事を尋ねられるのが当然であるのに、さも侮辱されたように感じて向ツ腹むかばらを立てた。然しかるに先方は既に一家を成した大家であるに、ワザワザ遠方を夜更ふけてから、（丁度十時半頃であつた、）挨あいさつ拶に來られたというは礼を尽した仕方で、誠に痛み入ひそつて窃に赤面した。

早速社へ宛てて、今送つた原稿の掲載中止を葉書で書き送つてその晩は寝ると、翌る朝の九時頃には鷗外からの手紙が届いた。時間から計ると、前夜私の下宿へ來られて帰ると直ぐ認しためて投郵したらしいので、（この頃の郵便はこう早くは届かないが、その

頃は今よりも迅速だった。文面は記憶していないが、その意味は、私のペン・ネームは知っていても本名は知らなかったのも失礼した、アトで偶つと気がついて取敢えずお詫びに上ったがお留守で残念をした、ドウカ悪く思わないで復た遊びに来てくれという、慇懃な、但し率直な親みのある手紙だった。

折返して直ぐ返事を出し、それから五、六日して或る夕刻、再び花園町を訪問した。すると生憎運動に出られたというので、仕方がなしに門を出ようとすると、入れ違いに門を入ろうとして帰り掛ける私を見て、垣に寄添つて躊躇している着流しの二人連れがあつた。一人はデツプリした下脹れの紳士で、一人はゲツソリ頬のこけた学生風であつた。容子がドウモ来客らしくな

いので、もしやと思つて、佇^{たちどま}立って「森さんですか、」と声を掛けると、紳士は帽子に手を掛けつつ、「森ですが、君は？」

「内田です、」というと、

「そうか、」と立ちながら足を叩^{たた}いて頹^{くず}れるように笑つた。「宜^よかつた、宜かつた、最少^{もすこ}し遅れようもんなら復た怒られる処^{ところ}だつた。さあ、来給え、」と先きへ立つて直ぐ二階の書齋へ案内した。

「こないだは失敬した。君の名を知らんもんだからね、どんな容^{よう}子の人だと訊^きくと、鞆^{かばん}を持つてる若い人だといふので、（取次^{とりつぎ}がその頃^{わたし}私が始終^さ提^さげていた革^{かわ}の合切^{がつさい}袋^{ぶくろ}を鞆と間違えたと思える。）テツキリ寄附金勧誘と感違^{かんちがひ}いして、何の用事かと訊^きかしたんだ。ところが、そんなら立派な人の紹介状を持つて来ようと

ツウと帰ったというのが如何にも皮肉なので、誰か知らんと色々考へてる中^{うち}に偶^ふつと浮んだのは君だ。ドウモ君らしい。コイツ失^し敗^まつたと、直ぐ詫^わびに君の許^{もと}へ出掛けると今度は君が留守でボンヤリ歸つたようなわけさ。イヤ失敬した、失敬した……」と初めから碎けて一見旧知の如くであつた。

その晩はドンナ話をしたか忘れてしまつたが、十時頃まで話し込んだ。学生風なのはその頃マダ在学中の三木^{みきたけじ}竹二で、兄弟して款待されたが、三木君は余り口を開かなかつた。

鵜外はドチラかというところス・ハアテツドで、或る限界まで行くとそれから先きは厳として人を容^いれないという風があつた。

が、官僚氣質かたぎの極めて偏屈な人で、容易に人を近づけないで門前
 払いを喰わすを何とも思わないように噂うわさする人があるが、それは
 鷗外の一面しか知らない説で、極めてオオポンな、誰に対しても
 城府を撤して奥底もなく打解ける半面をも持っていたのは私の初
 対面でも解る。若い人が常に眷なついて集まったので推しても、一部
 に噂されるような偏屈な狭きようあい隘いな人でなかったのは明白である。
 だが、極めて神経質で、学徳をも人格をも累するに足らない些さ
 事じでも決して看過しなかった。十数年こうち以往文壇と遠ざかってから
 は較やや無関心になったが、『しがらみ草紙』や『めざまし草』で
 盛んに弁難論争した頃は、六号活字の一行二行の道聴塗説をさえ
 も決して看過しないで堂々と論駁ろんぱくもするし弁明もした。

それにつき鵠外の性格の一面を窺^{うかが}うに足る一挿話がある。或る年の『国民新聞』に文壇逸話と題した文壇の楽屋咄^{ばなし}が毎日連載されてかなりな呼^{よびもの}物となった事があつた。蒙^{もうぎゆう}求風に類似の逸話を対^{ついれん}聯したので、或る日の逸話に鵠外と私と二人を列^{なら}べて、堅忍不拔精力人に絶すと同じ文句で並称した後に、但^ただ異なるは前者の口舌の較^やや^{けんじゆう}謬^{みかた}なるに反して後者は座談に長じ云々と、看方^{みかた}に由れば多少鵠外を貶^{けな}して私を揚げるような筆法を弄^{ろう}した。この逸話の載つた当日の新聞を読んだ時、誰が書いたか知らぬがツマラヌ事を書いたもんだと窃に鵠外の誤解を恐れた。果^{はた}せる哉、鵠外は必^{てつきり}定私^{てつきり}が自己吹聴のため、ことさらに他人の短と自家の長とを対比して書いたものと推断して、怫^む然^つとしたものと見える。

その次の『しがらみそうし柵草紙』を見ると、イヤ書いた、書いた、僅か

数行に足らない逸話の一節に対して百行以上の大反駁を加えた。

要旨をかいつま搔摘むと、およそ弁論の雄というは無用の饒じようぜつ舌を弄

する謂いではない、鷗外は無用の雑談冗弁をこそ好まないが、かつ

てザクセンの建築学会で日本家屋論を講演した事がある、邦人に

して独逸語ドイツを以て独逸人の前で演説したのは余を以て嚆矢こうしとすと

いうような論鋒ろんぼうで、一々『国民新聞』所載の文章を引いては、

この処筆者の風ふう丰彷彿ほうぼうとして見はるとたたみか置掛けて、暗に私に

諷あてつけて散三さんざに当り散らした。ところが、この文壇逸話の筆者

は私でなくて山田美妙であつたのだ。私は昔から人の反駁なぞは

余り氣に掛けない方で、大抵は雲煙過眼してしまふし、鷗外の氣

質はおおよそ吞のみこ込んでるから、威丈高いたけだかに何をいおうと格別氣にも留めなかったが、誰だか鷗外に注意したものがあつたと見えて、その後偶然フラリと鷗外を尋ねると、私の顔を見るなり、「イヤ失敬した、失敬した、アレは美妙が書いたんだってね、君かと思つたのでツイ失敬した、まあ勘弁してくれたまえ、」と氣の毒そうにいった。鷗外は向むか腹つばらを立てる事も早いが、悪いと思うと直ぐ詫まる人だつた。

鷗外は人に会うのが嫌いで能く玄関よ払いを喰わしたという噂がある。晩年の鷗外とは疎縁であつたから知らないが、若い頃の鷗外はむしろ客の来るのを喜んで、鷗外の書齋にぎはイツモお客で賑わつた。

私が最も頻繁に訪問したのは花園町から太田の原の千駄木時代せんだぎであつた。イツデモ大抵夜るだつた。随分十時過ぎから出掛けた事もあつた。或る晩、大分夜が更けたらしく思つたので、丁度茶を持って来た少婢に向つて、「何時になります？」と訊きくと、少婢は眠ねそうな眼をしつつ、「モウ十二時で御座います、」といつた。

すると鷗外は大喝して、「モウ十二時とは何だ、マダ十二時とナゼいわん、」と叱しかりつけた。私は氣の毒になつて徐おもむろに起ち掛けようとする、と、「マダ早いよ、僕の処は夜るが昼だからね。眠くなつたらソコの押入から夜具を引ひきずり摺出してゴロ寝をするさ。賀か古こなぞは十二時が打たんけりや来ないよ、」といった。

賀古翁は鷗外とは竹馬の友で、葬儀の時に委員長となった特別の間柄だから格別だが、なるほど十二時を打ってからノソノソや
つて来られたのに数回邂逅^{であ}つた。

こんな塩梅^{あんばい}で、その頃鷗外の処へ出掛けたのは大抵九時から
十時、帰るのは早くて一時、随分二時三時の真夜中に帰る事も珍
らしくなかった。私ばかりじゃなかった、昼は役所へ出勤する人
だったからでもあるうか、鷗外の訪客は大抵夜るで、夜るの千朶^{せんだ}
山房は品詩論画の盛んなる弁難に更けて行つた。

鷗外は睡眠時間の極めて少ない人で、五十年来の親友の賀古翁
の咄^{はなし}でも四時間以上寝た事はないそうだ。少年時代からの親交で

あつて度々たびたび鷗外の家泊つた事のある某氏の咄でも、イツ寝るのかイツ起きるのか解らなかつたそうだ。

鷗外の花園町の家の際に私の知人が住んでいて、自分の書齋と相面する鷗外の書齋の裏窓に射さす燈火あかりの消えるまで競争して勉強するツモリで毎晩夜を更かした。が、どうしてもそれまで起きていられないので燈火の消える時刻を突留める事が出来なかつた。或る晩、深夜に偶ふと眼が覚さめて寝つかれないので、何心なく窓をあけて見ると、鷗外の書齋の裏窓はまだポツカリと明るかつた。「先生マダ起きているな、」と眺めてみると、その中にプツと消えた。急いで時計を見るとあけがた払暁の四時だつた。「これじゃアとても競争が出来ない、」とその後私の許へ来て話した。

尤も二時三時まで話し込むお客が少くなかったのだから、書斎のアカリの消えるのが白々しらしら明けであるのは不思議でない。「人間は二時間寝れば沢山だ、」という言葉は度々鷗外から聞いた。
 「那破烈翁ナポレオンは四時間しか寝なかったそうだが、四時間寝るのを豪えらがる事はないさ、」と平気な顔をして、明け方トロトロと眠ると直ぐ眼を覚まして、定刻に出勤して少しも寝不足な容子を見せなかったそうだ。

鷗外は甘さつまいも諸たけのこと筍が好物だったそうだ。肉食家というよりは菜食党だった。「野菜料理は日本が世界一である。欧羅巴ヨーロッパの野菜料理てのは驚うぐいすのスリ餌えのようなものばかりだから、「ヴェジテ

ラニヤン・クラブ」へ出入する奴は皆やつ青瓢箪あおびょうたんのような面つらをしている。が、日本では菜食党の坊主は皆血色のイイ健康な面をしている。日本の野菜料理が衛養に富んでるのは何よりこれが第一の証拠だ、」というのが鷗外の持論であつた。

「牛や象を見たまえ、皆菜食党だ。体格からいったら獅子ししや虎とらよりも優秀だ。肉食でなければ營養が取れないナゾというのは愚論だよ。」

が、鷗外は非麦飯主義で、消化がイイという事は衛養分が少ないという事だという理由から固く米飯説を主張し、米の營養は肉以上だといつていた。

或る時、その頃私はや痩せていたので、ドウしたらふと肥るだろうと

訊^きくと、

「それは容易^{わけな}い事だ。毎日一度大飯^{おおめし}を喰^くつて、日比谷^{ひびや}の原（その頃はマダ公園でなかった）を早足で三遍も廻^まれば直^じき肥^ふる。それには牛肉で飯を喰^くうのが一番だ。肉が營養があるというわけではないので、食慾^{しげき}を刺戟^{しげき}するのは肉が一番だから、肉で喰^くうのが一番飯が余計喰^くえる。」と大食と食後の早足運動を力説した。

鵜^う外の日本食論、日本家屋論は有名なものだ。イツだっけか忘れたが、この頃は馬鹿に忙^{いそ}がしいというから、何が忙^{いそ}がしいかと訊くと、毎日々々壁土の分析ばかりしているといった。この研究が即ち日本家屋論の一部であつた。この日本食論と日本家屋論の或るものは独逸文で書かれて独逸の学界で発表されたから日本よ

りは独逸で有名である。

独逸といえ、或る時鷗外を尋ねると、近頃非常に忙がしいという。何で忙がしいかと訊くと、或る科学上の問題で北尾次郎と論争しているんで、その下調べに骨が折れるといった。その頃の日本の雑誌は専門のものも目次ぐらいは一と通り目を通していたが、鷗外と北尾氏との論争はドノ雑誌でも見なかつたので、ドコの雑誌で発表しているかと訊くと、独逸の何とかいう学会の雑誌（今はその名を忘れた）でだといった。日本人同士が独逸の雑誌で論難するというのは如何にも世界的で、これを以ても鷗外が論難好きで、シカモその志が決して区々日本の学界や文壇の小蝸殻しょうかくに跼きよく踏せきしなかつたのが証される。

鷗外の博覧強記は誰も知らぬものはないが、學術書だろうが、

通俗書だろうが、手当り任せに極めて多方面に渉わたつて集めもし読

みもした。或る時尋ねると、極細ごくほそい真書しんかきで精々せつせと写し物をして

いるので、何を写しているかと訊くと、その頃地学雜誌に連掲中

の「鉤物字彙じい」であつた。ソナナものを写すのは馬鹿馬鹿しい、

近日丸まるぜん善ぜんから出版されるという、そうか、イイ事を聞いた、

無駄むだ骨折ぼねおりをせずとも済んだといった。（それから一と月ほどして

出版されたのを寄送すると、大遍喜んだ礼状をよこした。）

その時、そんなものを写してドウすると訊くと、「何かの時に

は役に立つさ、」といった。「何でも書物は一生の中に一度役に

立てばそれで沢山だ。そういう意味で学術的に貴いものなら何でも集めて置く、」と書棚しよだなの中から気象学会や地震学会の報告書を出して見せた。こういうものまでも一と通りは眼を通さなければ気が済まなかったらしい。が、権威的の学術書なら別段不思議はないが、或る時俗謡か何かの咄が出た時、書庫から『魯文珍報』ろぶんや『親釜集』おやかましゅうの合本を出して見せた。『魯文珍報』は黎明れいめい期の雑誌文学中、較やや特色があるからマダシモだが、『親釜集』が保存されてるに到つては驚いてしまった。

一と頃江戸図や武鑑を集めていた事があつた。本郷の永盛の店頭よに軍服姿の鷗外を能く見掛けるといふ噂を聞いた事もある。その頃偶ふつと或る会で落合つた時、あたかも私が手に入れた貞じょうき

享ようの江戸図の咄うたをすると、そんな珍本は集めないよ、僕のは安
 い本ばかりだと、暗に珍本無用論を臭におわした。が、その口の端はたか
 ら渋江抽齋しぶえちゆうさいの写した古い武鑑（？）が手に入ったといつて歓
 喜と得意の色を漲もらした。

鵜外ういが抽齋ちゆうさいや蘭軒らんけん等の事跡を考証したのはこれらの古書校勘
 家と一縷いちるの相通あいつずる共通の趣味があつたからだろう。晩年一部の
 好書家が掖齋えきさい展覧会を催したらドウだろうと鵜外に提議したと
 ころが、鵜外は大賛成で、博物館の一部を貸してもイイという咄
 があつた。鵜外の賛成を得て話は着々進行しそうであつたが、好
 書家ナンテものは蒐集には極めて熱心であつても、展覧会ナゾは
 気紛れに思立つても皆ブショウだからその計画も撈取はかどらないでと

うとう実現されなかった。（この咄については『明星』掲載当時
 或る知人から誤解であると手^{しゅかん}束して訂正されたが、これもまた
 鷗外自身の口から聴いたのだから、鷗外の思違いかも知れぬが取
 消さずに置く。）

若い人たちの中には鷗外が晩年考証に没頭して純文芸に遠ざか
 ったのを惜^{おし}んで、鷗外を追懐するにつけて再び文芸に帰る期が失
 われたのを遺憾とするものがあつた。

が、私の思うま^{ありてい}まを有体にいうと、純文芸は鷗外の本領では
 ない。劇作家または小説家としては縦^{たとい}令第二流を下らないでも第
 一流の巨匠でなかつた事を肯^{あえ}て直言する。何事にも率先して立派

なお手本を見せてくれた開拓者ではあつたが、決して大成した作家ではなかつた。

が、考証はマダ僅わずかに足を踏掛けたばかりであつても、その博覧癖せんさくと穿鑿せんさく癖とが他日の大成を十分約束するに足るものがあつた。『帝諡考』ていしこうの如き立派な大著を貢献されたのは鴎外の偉大な業績の一つである。考証家の極めて少ない、また考証の極めて幼稚な日本の学界は鴎外の巨腕に待つものが頗すこぶる多かつた。鴎外が董と督うとくした改訂六国史りつこくしの大成を見ないで逝いつたのは鴎外の心残りでもあつたろうし、また学術上の恨事でもあつた。

鴎外が博物館総長の椅子に坐るや、世間には新館長が積弊を打

破して大改革をするという風説があつた。丁度その頃、或る処で鷗外に会つた時、それとなく噂の真否を尋ねると、なかなかソナわけには行かないよ、傍觀者は直ぐ何でも改革出来るように思うが、責任の位置に坐つて見ると物置一つだつて歴史があるから容易に打^{ぶちこわ}壊す事は出来ない、改革に焦^{あせ}つたなら一日だつて勤めていられるもんじやないといった。

だが、鷗外時代になつてから目に見えない改革が実現された。陳列換えは前総長時代からの予^{かね}ての計画で、鷗外の発案ではなかつたともいうし、刮^{かつ}目^{もく}すべきほどの入換えでもなかつたが、左^とに右^かく鷗外が就任すると即時に断行された。研究報告書は経費の都合上十分抱負が実現されなかつたが、とにかく鷗外時代となつ

て博物館から報告書が発行されるようになったのは日本の博物館の一進歩である。鷗外は各国博物館の業績に深く潜思して、就任後一、二回落合った偶然の咄のついでにも抱負の一端を洩らし^もていた。もし長くその椅子に坐していたら必ず新生面を拓く種々の^{むなざん}胸算があつたろうと思う。^{しょうそういん}正倉院の門戸を解放して民間篤志家の拝観を許されるようになったのもまた鷗外の尽力であつた。この貴重な秘庫を民間奇特者に解放した一事だけでも鷗外のような学術的芸術的理解の深い官界の権勢者を失つたのは芸苑の恨事であつた。

鷗外は早くから筆蹟が見事だった。晩年には益々^{ますます}老熟して蒼^そ

うけい
 勁精嚴を極めた。それにもかかわらず容易に揮毫きごうの求めに応じ
 なかった。殊ことに短冊へ書くのが大嫌いで、日夕親炙しんしやしたものの
 求めにさえ短冊の揮毫は固く拒絶した。何でも短冊は僅か五、六
 枚ぐらいしか書かなかつたろうという評判で、短冊蒐集家の中に
 は鷗外の短冊を懸賞したものもあるが獲えられなかつた。

日露戦役後、度々部下の戦死者のため墓碑の篆額てんがくを書かせら
 れたので篆書は堂に入った。本人も得意であつて「篆書だけは稽け
 古いこしたから大分上手になつた、」と自任していた。私は今人の筆
 蹟なぞに特別の興味を持つてゐるのではないが、数年前に知人の筆
 蹟を集めて屏風びやうぶを作ろうと思立つた時、偶然或る処で鷗外に会
 ったので一枚書いてくれというと、また冷かしの種にするんだろ

うと笑つて応じてくれそうもなかった。「そんな事をいわずに墓碑の篆額を書くツモりで書いてくれ」と重ねていうと、「墓碑なら書くよ、生きてる中は險けん呑のんだから書かんが、死んだら君の墓石へ書いてやろう、」といった。

「調じょうだん戯ぎじゃない。君と僕とドツチが先きへ死ぬか、年からいつたつて解るじゃないか。」

「そりやア解つてるさ。君のようにむやみと藥を飲むカラダじゃないからね。年なんかアテにならん。僕がアトへ残るのは知れ切つてる。こりやあマジメだよ、君が死ねばきつと墓石へ書いてやる。森に墓銘を書かせろと遺言状に書いて置いてもイイ、」と真ま顔がになつていった。

一度冠^{かんむり}を曲げたら容易に直す人でないのを知ってるからその咄
 はそれ切り打切^{うちきり}とした。が、万一自分が鷗外に先んじたらこの
 一場の約束の実現を遺言するはずだったが、鷗外が死んでしまっ
 たのでその希望も空^{むな}しくなった。これは数年前、故和田雲邨翁^{わだうんそん}が
 新収稀覯書^{きこうしよ}の展覧を兼ねて少数知人を招宴した時の食卓での対
 談であつた。これが鷗外と款語した最後で、それから後は懸違^{かけちが}
 つて一度も会わなかつたから、この一場の偶談は殊に感慨が深い。

私が鷗外と最も親しくしたのは小倉赴任前の古い時代であつた。
 近時は鷗外（のみならず他の文壇の友人）とも疎縁となつて、折
 々の会合で同席する位に過ぎなかつたが、それでも憶^{おも}出^{いだ}せば限

りない追懷がある。平生往来しない仲でも、僅か二年か三年に一遍ぐらいしか会わないでも、昔し親しくした間あいだ柄がらは面めんと対むかつた時にいい知れないなつかしさがある。滅多に会わないでも永い別れとなると淋しい感がある。

殊に鵑外の如き一人で数人前の仕事をしてなお余りある精力を示した人豪は、一日でも長く生き延びさせるだけ学界の慶福であつた。六十三という条、実はマダ還暦で、永眠する数日前までも頭脳は明めい晰せきで、息の通う間は一行でも余計に書残したいというほど元気旺おう勃ぼつとしていた精力家の易えき簣さくは希望に輝く青年の死を哀かなむと同様な限らない恨事である。

（大正十一年七月十六日記、翌月『明星』掲載、大正十三年十月補筆）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「明星」

1922（大正11）年8月号

※初出時の表題は「森鷗外君」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鷗外博士の追憶

内田魯庵

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>